

イチロー選手の引退に思う

平成 31 年 4 月 1 日 (19.04.01) 守山裕次郎

1. シアトルマリナーズ入団から退団まで

1) 入団当時 (2001 年) の姿とその後の活躍

思えば 18 年前の 2001 年、オリックスからシアトルマリナーズに移籍したイチロー選手だったが、大男揃いのメジャーで果たして活躍できるのだろうかと心配しつつ、是非活躍してほしいとの願いを込め、4 月に本拠地「セーフコフィールド」のライトスタンドから、エンゼルスとの 3 連戦を観戦したのがつい先日のことのように鮮明に思い出される。

日本ではパリーグの連続首位打者だったが、実力に勝る MLB でどれだけ通用するかは全く未知で、恐らく本人も不安一杯というのが当時の正直な気持ちだったであろう。

しかしながらそんな心配を吹き飛ばし入団 1 年目から「走・攻・守」に大活躍、新人王、首位打者、盗塁王、ゴールドグラブ賞その他を軒並み獲得、結局その年の MVP にも輝き、最高の成績を残すこととなった。

その後の活躍も実に目覚ましく、極めて難しい年間 200 本安打記録を 10 年間連続させ、2004 年にはジョージ・シスラーの記録 (1920 年 : 257 安打) を更新し、年間 262 安打の驚異的な記録を作った。ちなみに安打記録について調べると、過去 120 年間以上にわたる MLB の歴史の中で、年間安打数 235 本以上を達成したのは合計でもわずか 26 回のみで、そのうちイチローが 3 回、その他は最近の 70 年間でたった 4 回 (4 選手) だけである。

近代野球になり投手の技術も著しく向上し、それと共に打者の記録更新が難しい中でのこの成績はまさに驚異的である。年間 262 安打の記録はこの先当分、あるいは半永久的に更新できないだろうと思われる抜群の記録である。

2) ヤンキース松井選手との対戦

彼がシアトルに移籍して 3 年目の 2003 年、松井選手が巨人からヤンキースに入団した。せっかくの機会と思い「セーフコフィールド」で「イチロー対松井」の 3 連戦での対決を楽しみに、5 月に再びシアトルを訪問した。すでに 2 年間、素晴らしい実績を残しているイチローに対し、松井選手にも同じように MLB での活躍を期待しての現地観戦だった。

今でも強烈な印象として残るのは第 2 戦であった。4 回表、松井選手が 2 塁打を放ち、その後 3 塁まで進み、次打者の大きなライトフライをイチローが懸命にバックホームしたものの、悠々セーフでの得点となった。次に 6 回裏、走者 1 塁で再び松井に打席が回った。高々と上がった打球は一瞬ライトフライかと思われたが意外に伸びて、イチローが懸命にジャンプして差し出したグラブの先をかすめスタンドに飛び込む「最高のシーン」を目の前で見た。マリナーズファンで埋まったスタンドは一瞬静まりかえったが、自分としては心の中で大拍手すると共に、シアトルを再び訪問した甲斐があったと心底思った。

3) レッドソックス松坂投手との対戦

2007年に松坂投手がレッドソックスに移籍した。松井選手の時とは異なり、イチローとの投打の対決が見られる登板日を勘案し、思い切って3度目のシアトル訪問を決行した。

6月の対レッドソックス戦、第3戦に松坂が登板した。早速1回裏にイチローとの対決があった。あっという間にイチローが0-2と追い込まれて3球目も空振りし、予想外の「三球三振」となってしまった。松坂はその後も絶好調、3回2アウトまで完璧に押さえていたが、9番打者に2塁打を打たれ、イチローとの2度目の対決となった。1球目を振った打球は完全な「ドン詰まり」ながら、2塁ベース後方の「ラッキー・ポテンヒット」となり、幸運な打点1が記録された。この日の松坂は入団以来最高とも思えるピッチング内容で、イチローは3打席目も三振、結局松坂は8回、110球を投げて被安打3、四球1、失点1と、ほとんど付け入る隙のない実に見事な投球であった。

※ちなみにこの試合1-1で延長戦となり、11回裏イチローが四球で出塁、次打者の左中間2塁打の間に1塁から一挙ホームイン、ゲーム終了となった瞬間「セーフコフィールド」を埋め尽くした4万5千の大観衆は地鳴りのような歓声をあげ、彼らと一緒に喜びを共有することができた。この日は松坂のベストピッチングが見られ、それに苦しめられたイチローではあったが、最後は俊足を跳ばしてのサヨナラ勝ちとなり、「まるで絵に描いたような幕切れ」で、特に日本人にとってはこれ以上ない最高の試合となった。

このように2001年のイチローのマリナーズ入団をきっかけに、まさか3回もシアトルを訪問することになるとは想定もしなかったが、結果的には観戦したいずれの試合も記憶として鮮明に残る素晴らしい内容であった。当時わざわざシアトルまで行くことに多少逡巡したのも事実だが、「思い切って」それを実行して本当に良かったと思うところである。(何事も悩んだ時は「思い切って前に進む」ことの大切さを実感した1例でもあった)

4) ヤンキース、マーリンズへの移籍、及びマリナーズへの再移籍と引退

入団以来2010年まで、200本安打、打率3割、オールスターへの出場を10年間続けたイチローではあったが、2011年にこれらの記録が途切れてしまい、この頃から徐々に加齢と共に、特に打撃面での衰えが見られるようになった。そして2012年7月ヤンキースに移籍し、2015年にはマーリンズに移籍したものの、マリナーズ時代の10年間の成績には次第に及ばないものとなっていった。

2017年末にマーリンズを離れ、2018年シーズンは開幕直前まで所属が決まらなかった。イチロー選手の去就はどうなるのかと心配していたところ、3月に再びマリナーズと契約、5月からは会長付特別補佐の立場となって残りの試合には出場せず、先日の「東京ドーム」での今年の開幕戦「対アスレチックス」との2試合限定での出場を最後に、多くの日本人ファンに惜しまれつつ、永きにわたる現役生活にピリオドを打つこととなった。

この日本での開幕出場は、長年にわたるイチロー選手の貢献に対し、球団側の粋なはからいだったのだろうが、彼にとりこれ以上ない最高の花道だったことは間違いない。

2. 引退記者会見からうかがえるイチロー選手の野球観、人生観

東京ドームでの試合後、彼は正式に引退を表明した。深夜からの記者会見は午前0時をまたいでの85分にも及ぶものであったが、すべての質問に対して丁寧に自分の本意を説明する中で、長年にわたる野球生活を通じて得た彼の人生観の一端を知ることができた。

1) 引退の決断に後悔や思い残したことはありませんか？

今日の球場での出来事・・・あんなものを見せられたら後悔などあろうはずがありません。勿論もっとできたことはあると思いますが、他人との比較ではなく、自分なりに頑張ってきたということは明確に言えます。これを重ねてきて、重ねることでは後悔を生まないということはできないのではないかと思います。

2) 生きざままでファンの方に伝えられたことは何でしょうか？

生きざまというのは良く判りませんが、「生き方」と考えるなら、あくまで「はかり」は自分の中にあって、自分なりに「はかり」を使って限界を見ながら、ちょっと超えていくということを繰り返していく。そうすると、「いつの日からか、こんな自分になっているんだ」という状態になり、だから少しずつの積み重ねでしか自分を超えられないと思います。

一気に高みに行こうとすると、今の自分の状態とギャップがありすぎて続けられないと思うので、地道に進むしかない。進むだけでなく、後退もしながら、ある時は後退ばかりかもしれないが、自分が「やる」と決めたことを信じてやっていく。それが正解とは限らないし、間違ったことを続けてしまうこともあるけれど、そうやって遠回りすることでは、本当の自分に出会えないという気がしています。

3) 挑戦する上での判断基準は何でしょうか？

自分は成功という言葉は好きではありません。メジャーリーグに挑戦するということは大変な勇気だと思いますが、成功すると思うから行ってみたい、それができないと思うから行かない、という判断基準では後悔を生みますし、やってみたいなら挑戦すればいい。その時にどんな結果が出ようとも後悔はないし、基本的にやりたいと思ったことに向かう方が良いと思っています。

4) ファンの存在とは？

今まで何となく日本の方は「表現することが苦手」という印象がありましたが、今回の2試合で完全に覆りました。内側に持っている「熱い思い」が確実にあって、それを表現した時の迫力はとても今まで想像もできませんでした。

ある時まで、「自分のためにプレーすることがチームのためにもなるし、見ている人も喜んでくれる」と思っていました。ヤンキースに行ったあとぐらいから、「人に喜んでもらうことが一番の喜び」に変わりました。その意味で、「ファンの方々の存在なくしては、自分のエネルギーが全く生まれません」と言っても良いと思います。

5) 最低 50 歳まで現役と公言していましたが、日本に戻ってのプレーの選択肢はなかったのでしょうか？

日本に戻ってのプレーの選択肢はなかったです。理由はここでは言えません。ただ、50歳までとは本当に思っていました。結果的には有言不実行の男になってしまいましたが、でもその表現をしてこなかったなら、ここまでできなかったかなという思いもあります。だから、言葉にすること。難しいかもしれないけれど、言葉にして表現するというのは、目標に近づくひとつの方法ではないかと思っています。

6) かつて「孤独を感じながらプレーしている」と言っていましたが、ずっとそうだったのでしょうか？

孤独を感じて苦しんだことは多々ありました。しかしながら現在それは全くないですね。アメリカでは私は外国人ですから。外国人になったことで、人の心をおもんぼかることができるようになり、痛みが判るようになって、今までなかった自分が現れたんですよね。体験しないと自分の中からは生まれないので、この孤独を感じて苦しんだことは、将来の自分にとって大きな支えになるんだと、今は思います。

3. 個人的感想

2001年、日本人野手として初めてMLBに挑戦したとき、「セーフコフィールド」のライトスタンドでイチロー選手の後ろ姿を眺めながら、大いに期待する気持ちの一方で、厳しいメジャーで果たして実績を残せるのだろうか？というのが正直な気持ちであった。

それがまさか、MLBの大記録をここまで塗り替えるようになるとは「全くの想定外」で、当時、3回のシアトル行きを逡巡したが、今は思い切って決行して良かったと痛感する。

引退記者会見では、かつての「ちょっと気難しい感じのキャラクター」からは想像できないほどの饒舌なイチローだったが、すべての重圧から解放され、まるで昔の野球少年に戻ったかのように目が輝き、実に生き生きしていたのが印象的だった。

昨年、エンゼルスに大谷選手が入団、手術で後半戦は出場できなかったものの、二刀流での活躍でMLBの歴史に新たな1ページを加え、見事新人賞を受賞することとなった。

一方で、今年は菊池投手がイチロー選手と交代にマリナーズに入団、現在まで2試合に登板したが、期待通りの素晴らしいピッチングが見られた。

大谷選手には今年の後半戦から打者としての出場が期待されるが、その打撃力を大いに発揮してもらい、同じ岩手県出身の菊池投手との投打の対決が大変楽しみである。そして彼ら二人が共に活躍してくれたなら、来年以降になるだろうが、老体にムチ打って4度目のシアトル訪問計画を立て、今年から「セーフコフィールド」改め「Tモバイルパーク」となった「ボールパーク」での観戦を、是非実現させたいとも思っている。

以上